

山とスキー

□□□□□□□□□□□□□□□□

第二十七號

札幌山とスキーの會發行

大正十二年七月一日發行

大正十二年六月三十日印刷納本

次目號七十二第

記 事

北海道の冬期登山の道

故板倉勝宣 (一)

雪溪表面に於ける鱗狀斑紋の成因に就いて

六鹿一彦 (五)

アイステクニツク

ハンスケーニツヒ
岡村源太郎譯 (八)

或傳説の末路

マハストヘンゲル (七)

圖 版

室堂附近

青木勝 (九)

一ノ越

青木勝 (二)

大正十二年七月發行

火口原の波状雪	佐藤久一郎	(一五)
火口原の鑛山小屋	佐藤久一郎	(一六)
クライネシャイデツクよりユンプフラウを望む	坂村 徹	(一七)
屈撓試験に供したるスキーの用材とその破折状態	平井左門	(一八)
早朝のプロムナード	青木 勝	(一九)
五月の劔岳	青木 勝	(二〇)
奥大日のアレート、コルニツシエ	青木 勝	(二一)
ミクリガ池	青木 勝	(二二)
スタートに於けるハウク氏	青木 勝	(二三)
室堂と奥大日岳	青木 勝	(二四)
早朝のトレナーージュ	同	(二五)
ホルメンコロン競技場	青木 勝	(二六)
エヴェレスト探險隊盲腦者	青木 勝	(二七)
北面より見たるエヴェレスト	Finch	(二八)
Approach	稻積 猶	(二九)

Frighth	須藤 勇.....(二三)
在りし日の板倉勝宣君.....	中野 誠 一.....(二三)
立山頂上より見たる室堂附近一帯の高原.....	慶應山岳部.....(二四)
松尾峠頂上より見たる天狗平の森林.....	慶應山岳部.....(二五)
松尾峠頂上より大日早乙女の連山を見る.....	同.....(二五)
山に於ける板倉君.....	松方 三郎.....(二五)

圖 版	
傾斜度標準圖.....	(五)
惠庭火山略圖.....	竹 内 亮.....(三〇)
スキー地圖記號圖.....	(五)
フツブシスブリの登路.....	竹 内 亮.....(二三)
ハルツの地圖.....	(二五)
ロープの結び方.....	(二三)
立山遭難地略圖.....	(二五)

北海道の冬期登山の道

故板倉勝宣

針葉樹がすつかり雪の衣をつけて静まりかへつて、大きな斜面にとり残された様に立つてゐる中を、雪煙に包まれながら、ふつみんで行くシローイファアの姿は實に浮世を遙かにへだてゝ居る。宿屋の前の石膏板の様な雪の上で滑るのが、スキ一の氣持であると云はるゝ方があるならば、私はそれとは全く別な、私の頭に浮んでくるこれらの氣持を、同じスキーと云ふ字で呼ぶ事を避けずには居られない。この二つの考へには、全く渡りのつかないギャップがあるからである。

もしも一握りの雪をつかんで、それが團子になり、水が滴り出る様な雪で滑つて居るならば、或ひは他人のスプールでなければ、スキーが滑らない様な雪で滑つて居るならば、それは實に不幸である。いくら握つても團子の出来な雪、自分のつけたスプールの眺めながら、スウィングの

曲線のふくらみに出来る陰影を恍惚とながめいる氣持、この様な雪質をしてゐる處女雪の上を足に何のシヨックを感じないで飛んで行くと、襟元から雪煙がヒヤノミ飛びこんで來るのがわかる。しかしこんな雪や氣持は決して人臭い所にはころがつて居ないし、また得られるものぢあない。たつた一日山に入つて、もう銀座がなつかしくなつたり、甘いものが食ひたくなる人々には、淺草公園にローラースケートがある。お互ひに鯨が陸に上つて、象が海に入る様なことはしない方がいい。

樂に行かうと云ふのでは、こんな氣持は味ふ事は出来ない。それは絶えざる危険に慣らされ、困難をこらへながら山の奥にユートピアを探す人々にとつてのみ與へらるゝ味であつて、秩序ある訓練の出來たシローイファアにして初めて許さるゝのである。

少なくとも五人の足の強いロイフアーであることが要求される。氣温は確かに低い、そんな事は問題ではない。唯内地の様な悠長な事は出来ない云ふだけの事である。山頂に達しても直ぐに引返へさなければならぬ様な事は屢々ある。アザラシなどを悠々と、とつて居られては相手がたまらない。いざ云ふ時には、いつでも自分自身の身のまはりのものをしつかりと處理して機敏な行動をとらなければならぬ。手が凍つて来て、危ないと思つたら、直ちに豫備の手袋をはめかへなければいけない。ふだんは一枚で慣らして置く必要がある。木綿の軍用手袋でさへ随分な寒さにもたへられる様に慣らして置いて丁度いゝのだとして豫備二枚を大事にしまつて置けばいゝ。

スキーに油のしみこんだのは絶対に避けなければいけない。そんなものをもつて来ては、とても登れるものではない。アザラシをつければ、他のものよりも疲勞する。そして歸途には滑りすぎて又疲勞するであらう。雪のつく事はあつても、そんなに激しくはないのだから、先頭はそれを利用して少しく急に道をとらうとする時に、油のしみたスキーの所有者はいたづらに後滑りをやる。こんなこゝでは緊張した登山をすることが出来ない。

要するに、單に滑る人にとつては北海道の短時日の旅行は何の面白味もないであらう。何となれば、雪は短かい目

的の間では内地と同じ様に悪い事もあるし、平地の近くの斜面は不便であるし殺風景である。唯、山を歩く人にとつては、實に充實した旅をする事が出来る。雪は山へ入ればいゝし、人間も居ないし、夏よりも樂に山へ登ることが出来る。——私はこれから冬期の三週間位を利用して登つてこられる範圍で、北海道の千米突位の山々の登山の道を書いてみよう。或ひは何かの參考になるかも知れない。時期は二月がいゝのであるが、其時分は都合が悪いのなら、十二月末から一月にかけてもいゝ。

× × × × ×

青山温泉 函館から汽車に乗つて、初めに降りる所は昆布驛である。北東に約一里餘、僅かな登りの外は全部平地滑走で青山温泉に着くことが出来る。雪が悪いと思つたら温泉からの馬橋を利用するがいゝ。青山温泉は狭い谷間にあつて、全く眺望はないが湯槽の廣いのが取柄である。これから五万分の一地圖岩内圖幅に依つて説明して行かうと思ふ。一寸練習するのには、温泉の谷から上に左岸に出て、北からやゝ東に二十町許り行く、地圖に△839、3と云ふ山の麓に達する。この斜面は伐木の後で、太い樹の基部が雪の上に所々に顔を出してゐるが、大して邪魔に

はならない。

ニセコアンヌブリ

この邊の山は針葉樹が殆んどない爲に、山は樺ばかりで樹林の美しさには缺けて居るが、樹林帯を全くぬけいでた山の崇高さを味ふ事が出来る。例へばニセコアンヌブリ(1308.5)の如きは、八〇〇米突以上は全く木のない、急傾斜の山であつて、西側の谷はつぐれた様に急で、いつでも大きな陰影をもつてゐる。從つて頂上近くでは大抵雪は硬くて、時にはエツヂのたゝぬ事もある。これに登るには、青山温泉から往復七時間とみたらいいだらう。とつづくスロープは地圖に標高の入れてある斜面の一つ西の奴にとりついて行くのがいい。八〇〇米突の邊までは樺の林であるが、この邊から林をぬけて、雪が時としては硬くなつてくる。やがてやゝ東にまはる様な氣持で、出来るだけ傾斜のゆるい所をデッグザッグにきつて行く。頂上は尾根を少しく北に行かねばならない。是非登る氣ならアイスクリーパーの用意がある時もある。もし急傾斜のステンボーゲンがしたかつたら、西南の斜面を下りたがよからうが、時としては雪の不足の事があらうし恐ろしく急なこゝは確かである。

チセヌブリ(1134.5)

温泉から約二里あるから雪の深くない日を選んで、滑りに行くにいい山である。頂上は平らで缺頂圓錐形である。これも七時間と見ればい

い。地圖に小泉農場がある高臺に上つてから、ごくゆるい起伏した丘を歩いてゆき、チセヌブリがその麓の方を森に包まれて、愛らしくも立つてゐる。方向を常にその東麓をめがける様にして行く、やがて濛々と煙が立つので、馬場温泉であることがわかる。よく見ると家がある。人は番人のゐる時もある。更に進んで標高の入れてある樺の林の斜面をのほつて行く、900のやゝ西の平へ出る。その上ごくゆるい滑走地である。一〇〇〇米突のあたりでごく小さい樺もなく、雪も硬くなるが、斜面は大して急ではない。

頂上から下りは900までステンボーゲンで来て、900から800までは氣持のいい直滑降で、スウイングでまゐるし、800から馬場までは林のなかをスラロームで下りて行ける。

もしちがふ道から歸るなら、頂上から北東に下りて、大沼から夏道通り南に来て、地圖に大きな岩の書いてある所から、道と分れて東南にやゝ登つて國境線に平行に来て、國境線の下つて居るより一つ南の斜面をステンボーゲンで新山精錬所の谷へ下りて、△839、3の頂上を通つて青山温泉にかへる。(終)

(遺稿整理 一九三〇・一・三二 大島亮吉)

雪溪表面に於ける鱗狀斑紋の成因に就いて

六 鹿 一 彦

日本の山岳に氷河の現存しないのは此上もなく残念だけれど、大きな雪溪が多數に存在する爲に未だ幾分か慰められ、あきらめ得る。日本アルプス連嶺から此の雪溪を奪ひ

去つたならば、其の美の半を失ひ、其の魅力の八分を無くするであらう。此れ程重大な山岳美の一要素である雪溪に就いて従来あまり研究されて居ないのは不思議な事であり且又遺憾な事である。私は此の雪溪に就いて、其の内の外貌、特に其の表面に現出する鱗形の凹凸斑紋の成因に就いて考へて見たい。尤も此の考察は單に數年前の登山に際して一見した物を唯一の資料とし、銷夏の一方法として晝寢代りに空想を逞ふしたのに過ぎず、決して研究でもなければ、考察でもない。唯單なる想像に過ぎない事をお断りし

ておく。しかし現代科學は一の偉大なる想像の下に理論體系を形成して居るのだから、想像だとして頭から貶すにも及ぶまいと、圖々しくも述べたてゝ次第である。

先づ雪溪の表面に現出する鱗形凹凸斑紋の詳細なる記載を必要とするが、苟くも山に興味を持つ人等には、事新しく述べるには及ばぬ位、衆知の面白い外觀を呈して居る。

即ち、雪溪の表面は七八寸から一尺五六寸位の四角、五角乃至六角形の鱗形から成り、其の中央は凹形をなして居て各鱗形の接合部は著しく高くなり、或部分は特に堅い氷が接合線を示して居る事がある。そして多くの場合に此の接合部は塵を以て被覆されて居る。此の外觀は實に著しいもので如何なる登山者も此れに怪奇の眼を見張るものである

尙此の鱗形凹陥は雪溪の端に於ける側面にも發見されるものである。勿論此の場合には鱗形接合部の塵の堆積は存在しないのである。

却説以上の外觀は冬季から存在するものではなく、三四月頃までは全く平坦な表面を有して居るのであるが、六七月頃になつて始めて現出するものである。而かも其の雪が單なる凍雪でザラメ状のものに於ては認められず、此れより尙密に凝結して氷に一步近くなつて居る物に於てのみ認められる。従つて毎年消失する様な少量の残雪に於ては現出せず、萬年雪として殘存する部分或は毎年消失するも極めて其の雪質が微密な多量の残雪に於て認め得るのである（年々消失する残雪に於ても此の鱗狀斑紋が現れるや否やは一寸疑しいが、極めて多量のコムバクトな雪か此の斑紋を現出して居るのを、案内者が秋になれば此の雪は消失すると云つたのを信じて此處に記しておく）故に此の鱗狀斑紋は萬年雪に於て、云つただけでは語弊があるが、雪の極めて密に凝結して氷に近い性質を有するものに於て現出するのである。

一体雪谿を形成する雪は最初冬季に於て粉雪として堆積したものであるが、春になつて日中日射の爲に融解し、更に夜中に再び冷却されて雪片の數個が一個に凝結して粗狀の雪となる。更に翌日は再び融解し、又凝結し、連日此の

操作を繰返す爲次第に大粒の雪片を化し、遂に粒狀のザラメ雪となるのである。此れが多量に堆積されてある時は其の壓力によつて各粒は壓縮され、次第に氷に變るのである。そして遂には彼の氷河を形成するのであるが、日本に於ては未だ氷河には至らない。其の道程に於て留つて居るのである。雪谿の *Langtass* から空氣を取り去り各粒片を融合せしめれば氷河となるのである。謂はゞ氷河は餅であり、雪溪の萬年雪は蒸糰である。故に或る物理的性質に於ては氷も萬年雪も共通的である（と私は想像するのだ。此の點に就いては如何のものや、淺學の私は知らない）即ち攝氏零度に於ては最も其の容積が大であり、低温となるに従つて容積が減少する。氷に於て此の性質がある事は既知の事柄で、諏訪湖には彼の諏訪明神の御渡りを生じ、夜間氷の收縮によつて氷に割目が生じる際微妙なる音響を發する事によつても明に知られるのである。萬年雪に於ても確に此の容積の變化が存在するに違ひない。晝夜氣温の較差が甚しい山中に於ては特に此の容積の變化は著しいものであらう。斯くして萬年雪の一大塊である雪溪には無數の割目を生じるのである。

此の割目の形狀が如何なるものである可きかは淺學の私には判らないが、彼の火山岩に於て見る柱狀節理は四角、五角乃至六角形を呈し、又湖沼の泥土が乾燥龜裂する際は

同様の形状を示すのから考へて、此の場合にも亦四角、五角乃至六角形の割目を作るのではないかと思ふ。氷河の運動に關する理論の中で、氷を一種の粘性物体と見做して居る人があるのだから、本來 *viscous* な火山岩や泥土と此の万年雪との間に類似點を見出す事は無理ではあるまいと思はれる。だが此の點に於て、私が大變心細く思ひ残念なのは、万年雪に於て果して此の性質が認められるや否やが不明な點である。又万年雪の膨脹係數と温度との關係が確實に判らぬ爲、山中の五六月頃如何程までの温度に於てどれ程の巾の割目が生じるかが判明しないので斷定的に述べられぬ點である。此れには今少し多くの人の研究を待つ必要がある。だが數量的には不明だけれど万年雪に多角形割裂の生じる事は認められると思ふ。

斯くして生じた割目は空氣に依つて温められる事、宛も表面の部分と同様で、割目は雪の融解によつて日中雪が膨脹しても再び元の状態には復せず、明なる割裂を残すのである。其れが爲に表面を流れる融水は此の割目を傳はつて内部に浸透して行く。そして或一定の深さに達すれば内部の低温の爲に再び冷却されて氷結するのである。此の氷は万年雪よりも質に於て緻密で、氣泡を含有しない眞正の氷である。斯くして網目狀に割れた各裂隙には夜間の低温に達するに従つて氷が充ち、万年雪は網狀の氷を以て區劃さ

れるに至るのである。此の操作は連日繰替される。そして氷網は次第に安全を加へ其の太さをも増すのである。

時は経過して日射は益々其の力を増して、万年雪の消失は日に著しくなる。其の際多孔質の空氣を含む事の多い普通の万年雪は、網狀の氷よりも速に融解し去る爲、雪溪の表面は遂に彼の奇怪なる鱗狀斑紋を現出するに至るのである。

鱗狀斑紋の接合部即ち凸起部に塵埃の堆積を認めるのは此の斑紋の形成初期に先づ裂罅を生じて、融水が浸透した際、雪面に存在して居た塵が流されて水と共に裝罅に入つたものが、万年雪の消失と共に現れて來たものであらう。でなければ此の様な凸起部に塵の堆積を見る事は不可解である。

以上の如き原因によつて彼の雪溪の鱗狀斑紋は形成されるのであらうと思考する。此物が單なる風や日光の作用で作られるものでない事は、残雪の或物には存在しない事と日光の直射しない部分や風位の如何に係らず形成される事によつて明白であらうと信ずる。

だが此れは單なる想像である。此の想像を一の原理とするには次の如き觀察と實驗とが行はなければならない。

- 一、鱗狀斑紋の現出する時期
- 二、其の當時及び以前の氣温

三、雪に龜裂を生ずるや否や。及び其の形狀、深さ、廣さ(巾)

四、斑紋現出前に氷網の存在するや否や。

五、網狀裂罅内に塵埃の存在するや否や。

六、萬年雪と氷との融解速度。

右の事柄が研究せられ新しい智識が私等の前に展開される日の早く来るのを待つて居る。

☒一九二二年度瑞西冬季競技界特報

この特報は、唯々公報と本當に顯著な競技の計量を蒐集せるに止つて居る。

三月四日 シュリイエルゼエル地方に於ての、ミュンヘン市人の騎馬競走。

三月一〇、二一日 アントウエルペンに於て、歐羅巴第一流選手のアイスホッケイ開催

三月三一日より四月二日まで バアウル、ロツテル記念競技會、カイルパウデ近傍にて舉行。

四月二日 國際ジャムブ大會、フェルドベルグにて舉行

五月六日 セントクリストフにて五月のマラソン競走

五月二〇日 スキークラブ所屬教會なるツウグスピツツ

エに於て五旬祭競走開催

一九二四年萬國オリンピック冬季競技の豫告 一月二〇日より二月五日まで瑞西シヤモニーにて舉行さるゝ筈

國際ジャンプ大會拔萃

一九二三年二月一日 瑞西クロステルのセルフランガアシャントエにて舉行の國際ジャムブ大會にて Dr. Bauder は四九米の國際的新レコードを作れり。

因に氏の三回のジャムブ成績は次の如し

第一回 四一米 第二回 四九米 第三回 四二米

該競技會に於て參加せる熟練なる飛躍者中四三名は立ちしが、四七名はきは轉倒せり。而して四三名中四〇米以上のレコードを作れる第一流のベストメンバア一二名を有せり。之如何にその飛躍術の進歩し居るかを知らるに足るべし

(一九二三・五・二二種)

アイステクニツク

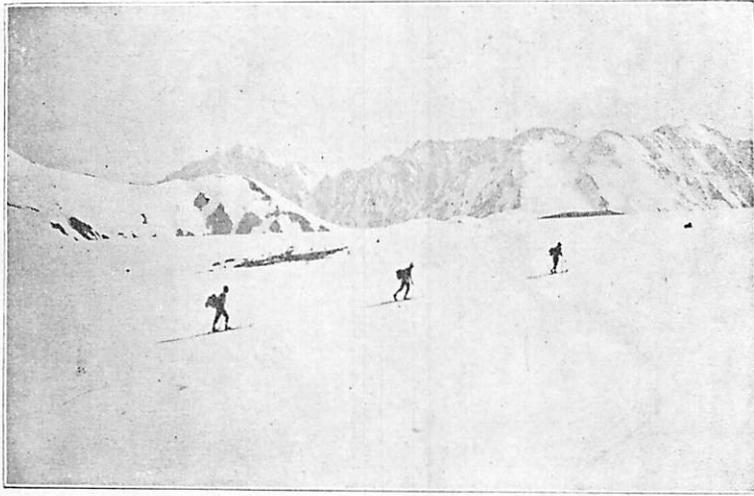
ドクトル・ハンス・ケーニツヒ

岡村源太郎 譯

所謂ロッククライミングの練習は、或程度までは練習場で爲す事が出来るが、氷雪登山についてのテクニツクとなると、練習の機會が殆ど無くなる。従つて一般にアイステクニツクなるものは極めて困難なるものとなり、氷の中で秀れた技術を有する者は比較的少い。然し冬期伐木を業とし、又枯草を追ふて谷間に降らなければならぬフューラーは本來の登山家としての以外に氷雪中に在る機會が多い、此日常習慣が獨り確實なうまさと確實性とを齎すが多くの場合フューラーを連れない人にはこれが欠けてゐる。そして唯若年時代の練習が丁度その助けとなるものであつて、如何に足をシュタイゲに保つべきかといふやうな方法は一般にその人の特性を表はして居る。氷雪中の動作に自由な者

は氷のシュタイゲに於ても猶安全なることは、岩の上に在ると同様である。然し之は足のみで立つて居ると思ふのは誤りで常に全身を以て立つて居ると考へなければならぬ。

氷雪中のテクニツクとなるザイル以外にピツケルの利用が必要となつて来る。このピツケルは確保の爲及びシュタイゲを切る爲に、その應用は極めて多様で、従つてピツケルの吟味は看過し得ぬ所である。柄は硬くて確保及び杖としての使用に對して充分でなければならぬ。即ち材は最上のアツシユの無瑕のものなるべく、時に熱した亞麻仁油を塗り又適當なる時に、柄の取換をなし折損の恐れを除く。ピツケルの柄の折れた爲に不幸の結果を生ぜしめた事は少くない。その長さは別に決まつた所が無く、寧ろ關係する



室堂附近

青木勝

のは目方である。普通は長さ一〇五種から一一五種まで、目方は凡そ千瓦乃至千三百瓦を最も可とする。金具の部は最上の鋼鐵を用ひ、良く鍛えられなければならない。又圖の如く柄に革のリングを附すのは優秀なる結果を示す事が多く、その取付場所はピッケルの遠心力によつて決し、一定せぬ。この装置による時はピッケルは手から滑り出すことが少く、又ピッケルシュリングが時にしつかり動かぬやうになつて居て、ハツケンの際に有利である。

軟雪中にあつては特別な技術を用ふる事は出来ない。各人が雪を踏みしめることは出来るが、シュタイゲ毎に滑る者が出来て、又下降の際は後になつた者は安全に降る爲に大變努力を要し、従つて足を踏み外すやうな結果となる。軟雪中では長くジクザクを取つてはいけない。眞直に上或は下に進み妨害となる場所は垂直にとるやうにし殆ど横にとらないのが最も好い。そして速かに前進する爲には歩を大きくする。歩幅を大にするのは確かに困難であるが、足踏は非常に安全である。

ズントが急になるミピッケルはストックミシでの使用上垂直になつて来る。急な所で下降の際に、顔を山側に向けるのが好いか谷側に向けるのがよいかといふことは、各人によつて相違するものである。全然安全でないと感じたなら寧ろズントの方に向くがよい。顔を山側に向けて降りる

か、或は谷側と向けて降るかによつて、足尖を又は踵を深く雪の中に入れ、且後に續く者の爲に、ステップが悪くないやうに注意せねばならぬ。

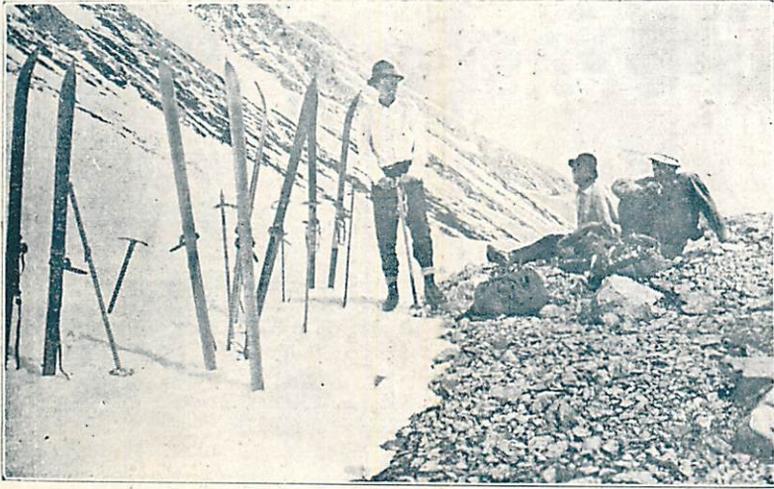
顔をヴントの方に向けて下降する時に、ピッケルを固く突挿し又は打ち込むことが出来れば、實にその動作は梯子を降るやうなものである。ステップを先きに踏まなければならぬ時は、一般に足尖を固く敲き込むことによつて、充分に安全を得ることが出来る。そして下降の際の先頭は上に居る者によつて確保せられて居るから、常に安全であつて、又その時ザイルが緊張して居るから之によつて後の者の爲に、ステップを大きくしてやる。或は特に後の者が足全体で又は特に踵で踏み入る事の出来るやうに、ステップを削つて深くするこゝが出来る。この方法は急なヴントを下降する際の先頭にとつて最も安全なる手段である。

顔を山側に向けないで降らうとする者はその者の事情は猶一層安全でなければならぬ。この時は下降中眺望が自由で、又起らんとする事件に對して絶えず注意を拂ふ事が出来る。之は特に自分の仲間の一舉一動に従ふことの出来る殿りの者にとつて利益ある方法である。足全体で特に踵でしつかりステップに立ち、背中をヴントの方に倚りかゝらせて居て、且つザイルを絶えずはりきらせて急撃のショックを避けて居るならば、殿りは充分に己が隊員を安全に

しておくことが出来る。

急な氷又は雪のスロープを通る時は、タイムに猶豫を與へるこゝが絶対に必要である。時としては一人が動いて居る間は他の者が確保して居なければならぬ。(多人数の場合には先頭と第三番目の者或は第二と第四番目の者といふ風に動く) 數あるアクシデントの中にも此の規定に對する不注意よりして生じたものが少くなく、之に對しては詳しい説明を與へるこゝが出来る。實際急な氷雪斜面に於ては絶えず確保手段をとるべきであつて、之の輕視は恐るべき不幸を引起す。

硬雪中にあつてはその動作は軟雪とは異り、ジツクザツクによつて登行する。そして雪の状態によつてピッケルのシュラッパ口か或はブライトハウエの方で打込み、足を動かして居る間はピッケルで身を安全に支へながら行くのが最も好い。即ち確實に立つた後にピッケルを進まんす方向に再び打ち込むのである。この方法は比較的用ふるこゝが少いやうであるが、事情によつては通常のピッケルストックで側に制動しながら進む方法より遙かに安全である。この二つの手段に於けるピッケル使用の差異は、丁度スキー滑走に於てストックを用ひて之のみ頼る方法と、所謂ノールウェー式の自由な而も正しい滑走法とに比することが出来る。只管にストックに身を托す者の動作は必要だけの身



越ノ一

勝木青

体の自由や安全さいふものが得られなくなる。杖に頼つたり膝を曲けて体を縮めてしまふ等いふことは實に不確實不安全の特徴といふてよい。

如何に隊員が氷雪中を進むべきかと云ふことは大いに雪の状態に關係あるものである。固くて安全である場合には緩やかにジックザリを爲すべく、軟かで特に薄板を形成して居る時は斜面を横にとるのは避けねばならない。急な斜面で雪の上層が僅かに氷結し居て、その下が粉雪である時にはジックザクは非常に危険である。

雪質の不良の時は寧ろ適當なる時に引返すべきだ。意地悪い死に對しては我等は逆ふことはできない。危険なる雪斜面を避け得べからざる際には、出來得る限り垂直に登降を爲し、何よりも以上の如きシュネーブルツクを防ぐやうにしなければならぬ。

ステツプの切り方

ステツプを如何に切るべきかといふことは説明しにくい。そして正規な方法で、繼續して氷にステツプを切る事は最も困難な事で、この點はフユラーを連れざる者の不利とする所である。年少の頃より殆ど毎日斧を手にし材木を刻まねばならぬ手仕事に慣れて居る者は、我々都會に生れた者に欠くる所の繼續力とか、又特に良好なる又確實なるステツプを切るとについての好條件を有して居る。ステツプを

切る際には、打ち込み数を少くし、併し力強い打ち込みによつて、我々が氣樂に安全に立つこゝの出来るステップを得なければならぬ。先づ第一の打ち込みは上方からでなく側方から打つべきである。そして初めから強く打ち込むべきか否かは、その氷の性質によつて相違し、裂け易い冬の氷は最も慎重に打たねばならない。第二には打込みを上方より與へてステップを更に深くし、仕上がりにはステップが圖の如く内部の方に傾きを少しく有するやうにすべきである。かくして登行の際には足尖の爲めに、下降に於ては踵に對して確實な足場を得る。

ステップは大きくなければならぬ。

ステップは又餘り遠く離れ過ぎてはいけない。餘り高いステップは、下降の際に足を交替させる毎に一方の足がまだしつかり足場をかためないのに、他方の足は曲がつて不安定の状態にあるやうになるから、下降の時に危険を生じ易くなる。

垂直に登つて行く時は、丁度梯子のやうにステップを真直に切らずに足段が二列に交互左右に並んで左足右足と丁度うまくあてはまるやうにすべきだ。之は下降の時に兩足が相並んでよく運ぶこゝの出来るやうにする爲である。(スタイグアイゼンが腓の部の紐に引掛からぬやうに注意せよ。ステップがジツクザツクに切らるゝ場合は、その廻轉す

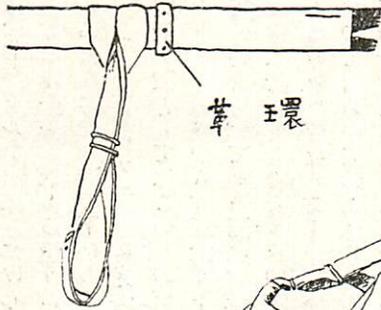
る場所に於てステップは兩足が踏み入り得る程度の大きさがなければならぬ。

ピッケルシュリングを用ふればピッケルを打込むに、片手だけでやる事が出来る。又ピッケルのすつと下の方を握るここが出来て、遠心力を利用することが出来る。それでステップを切る時は、常に筋肉を緊張させておく必要がないやうになる。そしてピッケルを打込む際、それが容易になつて、手及び腕を疲労せしむる反動を少くさせてくれる。之は特に長いピッケル使用の際の、時間の長い時に重要なことである。そして革のリングが手の關節部に固くくられてあるので、ピッケルを引抜く際に手から滑り出る心配がない。この方法によつてピッケルを以て長時間ステップを切つたものは、その極めて輕便なることを認めるのである。

氷雪中に於ける確保法

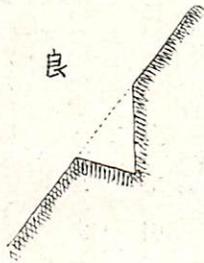
吾人が堅雪或は氷の中に於て、充分なる安全手段を盡し得ない云ふのが、今廣く擴がつて居る偏見であるが、之は全然誤まれるものであつて、ピッケルの柄を雪中に固く突き挿して居る限りは、立所に理想的なる安全手段を取り得るのである。

氷雪中に於ける手段はドツベルテジツヒエリングとして單獨の個人的な時と隊員を形成して居る時の手段がある



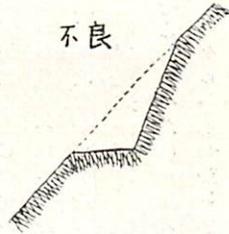
ピッケルシュリング

革玉環

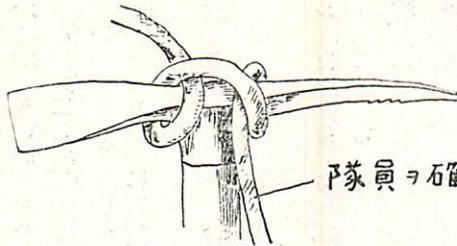


良

ステップ



不良



隊員ヲ確保スル為ノザイル

(a) 雪中確保法

單獨の場合には、ピッケルを出来るだけしつかりと挿入し、その上斜面の方に幾分倚りかゝるやうにすればよい。それからピッケルに出来るだけ深く下の方に自分の体に接してザイルを(ザイルシユラウフエを)巻きつける。

隊員に對する安全手段としてはこの時のザイルの残りの部分をピッケルストツクの後から注意深く下に伸してやるピッケルによつて保持せられてある間は、先の者がザイルの二倍の長さだけ位は滑り落ちても、その確保手段をとつて居る者はそのシヨツクを受けることがない。之はいつも働き得るやうになつて居る中立の支點なる所のピッケルストツクによつて制動せられてしまふのである。

前述の確保手段は氷河のシユバルテ通過の際は常に用ひらるべきである。ジツヘルングシユラウフエ及び伸されて居るザイルは、全く雪面上に接するやうにして置く。決して高くピッケルの金具の部に近く通らしてはいけない。之ピッケルの受けたシヨツクによつてピッケルが折損する憂ひある爲である。又シユバルテは上の方より下部が廣くなつて居たり、その縁の部が突出して居るやうなこまが少くないから、先頭は常にピッケルで注意深く雪を探りつゝ前進せねばならぬ。後にある者はザイルをしつかり張り切らせておいて先頭の一舉一動に注意を拂ひ、先頭がシユバル

テを通過せんとする時には之を安全にしてやる。その時ザイルを絶えず緊張せしむるとは最も重大なることであつて、之によつてシユバルテ中の墜落も適時に之を止め得るこの簡單なる規則に對する不注意の爲に如何に多くの不幸を醸したかわからない。一人が僅か二三米許りシユバルテに落ちた時は、大抵比較的大なる努力によつて引揚げることが出来るのであるが、そうでない其の者の墜落と重さの爲めに、他の仲間までが引取り込まれるやうになつてしまふ。

(b) 氷に於ける確保法

ピッケルストツクを雪或はファイルン(氷)に挿入し得ぬ時或は充分に之を保持し得ぬ時は、又以上と異なる方法を以て安全にするのである。

單獨の場合には、ザイルの自分の身より一米ばかり前方を圖の如く、ピッケルの金具に掛ける。そしてピッケルのシユピツツハウエの方を打込みそして斜面に壓しつける。出来るならピッケルの柄が全部斜面に接するやうにするがよ、又氷が碎け易い時には、シユピツツハウエの入る孔をこしらへなければならぬ。必要に應じては、膝又は腕でピッケルをしつかりと壓しつける。又ザイルに與へられたシヨツクがピッケルを抜き出してしまふこまなく、反つて益々固く氷に食ひ込むやうにする爲に、シユピツツハウエはその打込んだ時の傾斜の方向はザイルのシヨツクの働く

方向と丁度反對でなければならぬ。以上の方法によつて自分一人としての中立的確保點を得るものである。そしてこの際ピツケルに如何なる傾きを與ふべきかは、最も重要なことであつて常に注意深く行はなければならない。

隊員のある場合は、その隊員の爲めに延ばしてやるザイルは、やはりピツケルハウエのかけを通らせて、注意深く出してやらなければならぬ。かゝるザイルに與へられたシヨツクをこのやうにして支へるといふ確保法を爲した者は實にこの方法の効果多いのに驚くであらう。固くステツプに立つて居る人をもステツプから引き落してしまふシヨツク位は、殆ど例外無しに悉くピツケルに依つて制動せられてしまふのである。實際ピツケルハウエ及び斜面上に横になつてしつかりに壓しつけられて居るピツケルストツクは現今のX—ハーケンのやうに効果大に且つ大なる重量に耐え得るものである。

前述せる氷上安全手段に於ては（岩石中に於ける手段に反して）ザイルは唯數糶米位より要しないことを知るであらう。それであるから、氷雪中に於けるザイルの間隔は比較的短いのを可とする。そしてアイスヴントや山脊に於て隊員の一人がザイルの全長だけ墜落したとすれば、その時はその間隔が大きければ大きい程、その爲に生ずる打撃は大きいといふことを忘れてはならぬ。鱗裂ある氷河上に於

てはシュバルテンの危険がある爲、間隔は餘り小さくてはいけない。八米乃至一〇米位の長さのザイルを間に保つておけば、平地或は傾斜の緩い所なら、容易に墜落者の重量を止めることが出来る。間隔が小さければそれだけシュバルテ内墜落を防ぐに不利である。

さてシュバルテ中への墜落警戒については餘程注意深くしなければならぬ。毎度自分の前を探りながら、氷河の上を歩いて居る間は決して己が注意を忘らぬやうにする。殊に氷河の端に於けるランドシュバルテンは屢々最も危険性を有して居る。若しシュバルテに落ちても、その結果が無事にすんでもいつ危険が来るかも知れない。大なる警戒を必要とする。行進の際体より一米程前の所に於てピツケルに（簡単な小さな結び目の）ザイルシュラウフエを通すのが安全手段として有利である。又一人がシュバルテに落ちた場合には、先づピツケルを挿入して之によつて有效な支持點を得るやうにしなければならぬ。

以上の如き安全確保の仕事は豫め練習しておかなければならぬことは勿論のことである。それで濃霧の日に終日ヒユツテの中で煙草をくゆらしトランプを弄するよりは、近くの氷河のセラクスや小さなアイスヴントで二三時間のステツプ切り又は確保法の練習を爲す方が餘程氣がきいて居る。

シュバルテ墜落者の救助法

隊員が墜落したらそのシュバルテに近づく前に、先つその墜落後の経過はどうなつたかをよく吟味する。シュバルテはいつも行進方向に交叉して走つて居るものは限らぬものであることを知らなければならぬ。又ザイルがシュバルテの縁の部で擦れ切れてしまふことのやうに注意することは大切であるが、又ザイルが縁に切り込んでしまつてもいけない。ザイルは切り込んだ爲に直ちに凍つて固くなつてしまふ。いつも出来るなら直ぐに支持點を(ピッケルの柄で)作つて、ザイルがその上を軽く滑りながら引かれて行くやうにし、何にもならぬ引張るやうなことは止めなければならぬ。ザイルは一般にシュバルテの中懸つて居る墜落者を固く結び支へるのであるが、之は墜落者を傷け又は窒息せしむるやうになることがある。さて引上げる時には更に第二のザイルとして自分のフライになつて居る方のザイルの端を(自分を確保するザイルをしつかり固定してしまつてから)下に伸してやる。この時兩足又は片足が入る位の小さな環ルンゲをザイルの端にこしらへておくといふ。そこで墜落者が膝を起したら、そのザイルを上から引張り、又墜落者は体を伸ばしたらやはり上から引張るのである。このやうにしてやつて行けば恰も自分自身で上に揚るやうな工合となつて、又上で引揚げる者の勞力も極めて節減せらるゝの

である。

此の方法は墜落者が猶力があつてアクティブにこの仕事を助け得る時に、取らるゝものであるが、若しシュバルテの中で意識を失つたり負傷したりしたならば、之等の仕事は全部上で行はなければならぬ、この時は非常に困難で著しい力を上で要することゝなる。墜落の際にはよくザイルの衝撃の爲に肋骨を傷けることがある。それでこの時には墜落後何かシュバルテの中に身を支へる場所があつたならば、猶幾分ザイルを寬めて墜落者が下の方に行けるやうにしてやるがよい。そして又速やかに救助することが出来ずに、長時間かまはないでおかなければならないやうであると、苦惱そのものゝ爲にシュバルテの中から救ひ出さぬ内に、心臓麻痺に襲はしめなければならぬやうな事になる。

(Ratgeber für Bergsteiger)

× × × × × × × ×

或る傳説の末路

マハストヘンゲル

一人の氣紛れなりアリストは何の間違なのか、山へ登る事が好きだつた。他人から『君の様な性質の男が山へ登る等は一寸可笑い』と云はれると、『綿羊を放牧して見給へ、必然丘の上へ上へミジグザグに登りながら草を喰ふよ。今の科學で説明できない事だ。此を本能ミ云ふ字で満足して居るよ。綿羊でも人間でも同じさ、只、登りたいと云ふ、所謂本能の命に従つて居る丈さ』と簡単に逃ける方法を知つて居た。

然し此のリアリストは山は大好きだが山に纏はる傳説となると全く恐縮して居た。特に其の結末に『だから、此山では其から後、毎月十五夜の日には山の何處とかに何とかが出る』だから其から後、此山に生へる

何ミかの木は皆、枝が何とかなつて居る』と云ふ奴には殆ど老ほれた父親に四十男に説教されて居る時程に恐縮さゝれて居た。

或年の夏此氣紛れなりアリストはルツクサツクも持たずに近江の國の西湖岸の或る村に行つた。此村の西から北へ延びて居る比良ミ云ふ山は此男位のアルピニストには丁度手頃の山だつた。

宿に着いた夜、其の宿の老爺が話をしに來た。彼は自然明日登る心計の比良の山に就て尋ねた。老爺は其に答へた。そして話の終が追々此リアリストを恐縮させる例の傳説になつた。私は其の傳説の結末さへ話せば良いのだが順序として、其の傳説も一通紹介せねばならない。

武奈を北の端として此比良の山は南へ、色々の峯をもつて居る。其中の一つの打見と云ふ峯の近くに今で

は『小女郎が池』と稱んで居る周二三丁の池がある。此池に此傳説の中心が在るのだ。

比良の山麓の或る村に年若い浪士が住んで居た。何の爲に此村に住んで居たのかは知る必要は無い。然し毎日此若い浪士は弓と矢を手にして比良の笹の中で兎や雉を追つて居つた。處が或日——其は人の氣持を浮き立せる様な春の日が、慥に人をセンチメンタリズムに追込む秋の頃かに此の或日をした方が話が一寸でも實際らしくなる——何とした譯か雉一羽すらの獲物がない。若者は山の奥へ奥へと進んで行つた。そして薄暮になつた時初めて自分が常になく深入りした事に氣がついて空手で残念乍ら引返す事にした。處がふと見ると彼方の大木の根本に人間が立つて居る。そしてそれは何れの傳説にもよく現はれて來る公式通の美しい女性であつた。此山奥に唯一人立つて居る美人なら大低姪性の者に違ひ

ないと思ふのが普通の人間だが、傳説になると、そんな考を超越して居る。私は實際、此場合は私が谷崎潤一郎氏でない事を残念に思ふ。若し谷崎氏であつたら此美女の描寫に三頁や四頁浪費する事が出来ると思ふ兎に角、此美しい山の女性を見出して年若い浪士は姪性の者とし怪む前に偉大な讚美と喜悅を感じたのである。彼女自身も山の中では全く見る事の出来ない美しい若い男性には憧憬と崇拜を表現した物と見るのが自然だし、又左様でなければ話は此切になる。

それから後の状態の變遷はやはり型にはまつて居て珍しいものではない。若者は相變らず山へ出懸けた。そして時の経過は何日か何年かは知らないが、此二人の美しい男女の間には、ネクスト、ゼネレーションが惠まれた。其の子供は無論父母の美容を傳えては居たらうが其れが男兒であつたか女兒であつたかは知らず

にしまつた。然し此様な歡樂の日は多くの物語では極く短い物である。御他分にもれず此二人の間も其時が極く短かつたものと見るのが至當であるそして話はどこ迄も公式通に進行する。

或日の事であつた。山の女は其子供を籠の若者に手渡し乍ら話をした手取早く要領を云へば其女は比良の峯の或る池の主で本性は龍である。そして或る事情で此後は其池に住み得られない。そして北の山即武奈の岳の中腹に懸つて居る武奈の瀧へ移轉せねばならないと云ふのである。然し男手で子供は養へまいから腹を空かした時與へて呉れ云つて自分の片手の眼玉をくり抜いて男に渡した。私は残念ながら右の眼を抜いたか其とも左のかを知る機會も無かつたし、又、其眼玉を子供に喰はずのかそれもしやぶらすのか知らない恐らくはしやぶらせるのだらうと思つて居る。

旅のリアリストは此話を宿の老爺に聞きながら、至る處に科學的矛盾を發見して居た、

『其から後はあんだ！、此池を小女郎池で云ひますね、ほて、其から後ちうもんは此池に生れる魚は皆片眼どすね』

到着した。追々此リアリストの最も恐れて居た結末に到着した。百歩譲つて龍の子孫が魚に變化したと見ても、眼玉をくり抜く云ふ後天性が遺傳して後から生れる魚が片眼になり得られるなら、自分の家の猫は尻尾の短い子供を生まねばならんと云ふ事になる。リアリストは思はず首を肩の中に押込んで苦笑した。然し苦笑は途中から得意満面の笑顔に變つた。實際、リアリストは今迄に此程氣の利いた質問は思ひ浮んだ事がなかつた。此質問で今迄大人しく聞いて居た返報に此田舎老爺を一矢

に凹ませてやらうと思つた。そして此程急所をねらつた質問が自分に思浮べる能力があるからには、アインシュタインと面と向つて議論しても敗は取らないと思つた。第三者の私が見ても實に要領の良い質問であると思ふ。

老爺の煙草が鼻から出切ると旅のリアリストは此機逸してはと尋ねた『すると今でも小女郎池で魚を取れば片眼の奴ばかり取れるさかい？』

云ひ了つた時の得意は實に偉大なものだつた。そして老爺の答を聞き了つた時の恐縮さは又格別だつた。そして老爺の答が自分の問より要領の良い事を發見した時は實際自殺もしかねまい程の悲觀だつた。爺は悠然と答へた。

『そらあんだ、御維新からこつちはい皆兩眼になりましたがな！』

老爺の顔は『何を判り切つた事を聞くか？』と云ひたけだつた。

注意を要するが、此片眼の魚が御

維新から此方は兩眼になつたと云ふ事は、丁度御維新から後はチョンマゲがなくなり、兩刀がなくなり、其代々散髪ミステツキが町を活歩する様になつたと云ふ事と毫も變らない當然の成行である。

彙報抄録

伊吹山登山人員

緯度の比較的低い關西地方の人々に、エキサイティンググウインタースポーツの歡喜を與へつゝある所の伊吹山に、毎シーズン何程の人々が足を運ぶかと云ふことは甚だ興味ある事柄である。此に關し滋賀縣教育會の調査する所によれば左の如き數字を得る。

年 度	ス キ ー 入山者數	普通登山 者 數
大正元年	一五〇	一〇〇〇
二	二三〇	一〇〇〇
三	三二〇	二九〇〇
四	三五〇	四五〇〇
五	四〇〇	三〇〇〇
六	四五〇	五〇〇〇

此等の總計は何によつて作られたるかは不明なるも、概して本邦の現狀によれば一山の登山者數と云ふものゝ如き極めて粗雑で全く想定によるものさへある。なまればあまり信ずるに足るものではないが一面這般の傾向を察知し得るであらふ

H. U. S. V. 新着圖書

Alpen Journal—No. 225

Caulfield—Ski-tours 1922

—Der Winter Jahrg. 16 Nr. 1—12

—Deutsch Alpen Zeitung

Jahrg. 18 Heft 10—12

Dyhlen-G.—Skidloping i Fjällen 1919

—Skidlopingens Alnanna

Grunder 1919

Hoek.H.:—Der Schi 1922

7te Aufl.—1923

Korrespondenzblatt des Schweiz.

Ski-Verbandes

Luther, T.C. :—Der Skitourist 1921

Marschal, F. :—Das Skilaufen als

Sport und Verkehr mittel

Pewitz, O. :—Die Aufnahme der

Schneelandschaft und des Winterspor-

tes im Gebirge. 1920

Zsigmondy—Pantleke

Die Gefahren der Alpen. 6. Aufl 1922

Walz, G. :—Ski—Sport 1922

Philipp, :—Handy volume

Atlas of the World 1910

Fleischmann n. Steinbruehel :—

Lilienfelder oder Norwegers?

各高等學校大正十二

年度旅行部夏期計畫

北海道帝國大學豫科旅行部

- 第一班 蝦夷富士、洞爺湖、駒ヶ岳
- 第二班 支笏湖、惠庭岳、樽前山
- 第三班 八甲田山、十和田湖
- 第四班 鳥海山、月山
- 第五班 飯豊山、大目岳

第六班 余市岳方面

第七班 阿寒湖方面

第八班 利尻島、禮文島

第九班 暑寒別岳、惠庭別川

第十班 夕張岳方面

第十一班 大雪山山麓A班

第十二班 大雪山山麓B班

第十三班 日高山脈縱走

第十四班 オープケ川上流

第一高等學校旅行部

第一班 赤城、尾瀬、日光

第二班 奥秩父、八ヶ岳

第三班 木曾及乗鞍

第四班 常念山脈、槍ヶ岳、上高地

第五班 白馬連峰縱走

第六班 飯豊、大目岳

第七班 笠、双六、槍、穂高縱走

第八班 鳥帽子、槍、縱走

第九班 針ノ木峠、立山、劍岳

第十班 薬師、槍ヶ岳縱走

第十一班 甲斐駒、仙丈、白峰縱走

第十二班 摺見、惡澤、赤石岳

第十三班 鬼怒沼、尾瀬、平ヶ岳、銀山平

第十四班 上越國境

第十五班 北海道中部×タツク縱走

松本高等學校山岳部

第一班 常念山脈、槍ヶ岳、乗鞍岳

第二班 常念、槍、穂高岳縱走

第三班 槍、鳥帽子岳縱走

第四班(甲組) 針ノ木越え、立山

(乙組) 針ノ木越え、立山、劍岳、黒部

第五班 白馬岳

第六班 後立山山脈縱走

第七班 木曾山脈縱走

第八班 東駒ヶ岳、仙丈ヶ岳

第九班 白峰山脈縱走

第十班 摺見、赤石岳縱走

第十一班 赤石山脈縱走

第十二班 飯豊山(東北地方)

會 告

本誌第二年月は五月一日發行第二十六號を以て完了致しました。偏へに讀者諸彦の御援助によりました事と深謝致します。此處に第三年月を迎へますにつき舊に倍した御助力を賜はらん事を御願申上げます。

本月より發行日を毎月一日に變更致しました。六月は休刊致しましたが今秋中に倍大號を發行致し御期待にそひたいと存じます。

第二年月目録を本誌に添付致しました。製本せられる方の御便宜が思ひます。なほ第二年月目(自十六號至二十六號)の合本が近日中出來の豫定になつてゐます。御所望の方は御申込下さいませ。一部參圓六拾錢で御座います。

今回左記の處に轉居致しました。合せて御知らせ致します。

札幌市北六條西六丁目二番地

山とスキーの會

定 價 金拾錢

*前金御申込が、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時には最後の分の包装にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

合せて。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかかはらず雑誌の代價は頂きます。

大正十二年六月三十日印刷
大正十二年七月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 赤 松 勤

印刷兼 發行者 長 谷 川 敦

札幌市北二條西二丁目
札幌印刷株式會社

札幌市北六條西六丁目
山とスキーの會

發行所

振替口座水樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No. 27. Julio 1928. Sapporo, Japanujo.

大正十二年六月三十日印刷
大正十二年七月一日發行

(每月發行一回)

山とスキー 第二十七號

定價金參拾錢



登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一號

振替東京六一七號